



令和4年度 東京都北区立堀船中学校

堀船中だより

令和4年6月 第3号

校長 阿久津 光生

〒114-0004

東京都北区堀船 2-23-20

Tel 03-3911-8817

心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標

自ら学び 自ら考え 自ら行動できる生徒

《3年生 修学旅行（京都・奈良・伊勢の旅）を無事に終えることができました》

5月22日（日）～24日

（火）、2泊3日の修学旅行に行っていました。昨年・一昨年と、修学旅行は中止を余儀なくされてきましたが、今年やっと実施することができました。

現三年生にとっては、中学校生活における初めて最後の宿泊行事となりました。三日間で京都～奈良～伊勢を巡る中身の濃い旅となりましたが、みなさんマナーが大変よく、たくさんの楽しい思い出とともに、今年の三年生の修学旅行のスローガン

「STORY～みんなで作る青春物語」は見事に達成されました。



《朝学習 NIE を毎週金曜日に行っています》

本年度より、毎週金曜日の朝学習は、新聞のコラムを読んで自分の感想や意見を書くことを全校で行っています。NIE（Newspaper in Education）と呼ばれるこの取組は、学校などで新聞を教材として活用する活動になります。年間を通じた積み重ねにより、読解力・表現力を養うことが目的です。生徒のみなさんは、限られた時間の中、集中して取り組んでいます。

以下、これまでの朝学習 NIE の記事を紹介いたします。

- 第1回「電車で背負うリュック大迷惑」
- 第2回「知床半島で観光船が行方不明に」
- 第3回「天声人語」ウクライナの戦争によせて」
- 第4回「居酒屋バイトで知る『反面教師』」
- 第5回「ネットカジノはまる若者」



《1年生 渋沢栄一ゆかりの地をめぐるしました》

5月19日（木）、1年生は渋沢栄一ゆかりの地めぐりを行いました。渋沢栄一の副読本を持って、副読本に載っている内容を確認しながら、見学地を周りまわりました。副読本の題名は「LOVE LIVE LEAD」です。

見学ルートは以下のとおりでした。

- 1.王子駅前サンスクエア付近の「洋紙発祥の地」（P20）→2.旧大蔵省醸造試験所第一工場（P41）→3.晩香廬（ばんこうろ）→4.青淵文庫（せいえんぶんこ）（P43）→5.飛鳥山博物館→学校

今年も渋沢栄一の副読本「LOVE LIVE LEAD」を活用した学習を、全学年で取り組んでまいります。



《6月4日（土）運動会を実施いたします》

新型コロナウイルス感染症もまだ油断はできませんが、少しずつ収束に向かっております。そのような中、感染症予防に十分配慮しながら、生徒たちは「一心動体心燃やして、絆の力で走り抜け」のスローガンのもとに、運動会の練習をして参りました。昨年度の無観客での実施をはじめ、数々の制限の下ですっと耐え抜いてきた生徒たちですが、今年の運動会は、保護者・ご来賓・地域の皆さま等の前で演技できることを、心から喜んでおります。そんな生徒たちの、元気いっぱい、持てる力を思う存分に発揮する姿をご覧いただければ幸いです。

北里柴三郎の歩んだ道（4）～ベルリンへ～

明治19(1886)年1月、マルセイユから列車でドイツの首都ベルリンに到着した北里は、ベルリン大学に向かうと、ローベルト・コッホが所属長を務める衛生研究所を訪ねました。世界各国からやってくる多くの研究者の中から入門を許された北里は、翌日にはコッホから与えられた実験課題に取り組み始めます。

北里の仕事は、実験課題に対して実験計画を立て、計画に必要な実験器具を準備するところからスタートしました。北里は寝る間も惜しんで一心不乱に実験に没頭し、誰よりも正確な実験結果を残したため、コッホからの信頼を早くも勝ちとります。そればかりか、北里の勤勉さと仕事の正確さには、研究所の上司も同僚も皆一様に驚きました。

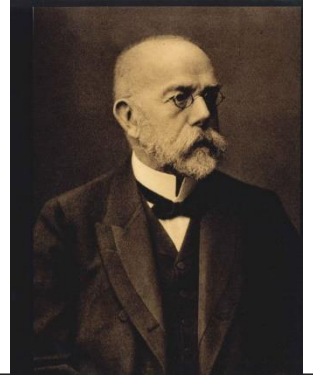
そんな北里に、コッホはコレラについて研究するよう課題を与えます。コレラとは、コレラ菌が食べ物や飲み物を通して体内に入ることによって感染症を引き起こす病気です。下痢と嘔吐による脱水症状、筋肉の痙攣などを引き起こします。幕末から明治にかけて日本でも大流行し、「コロリ」という呼び名で恐れられていました。現在でも、インド、東南アジア、アフリカで流行し、死者を出しています。北里は弟や妹を幼くして亡くしていました。当時はなぜ亡くなったのか分からなかったのですが、研究をしているうちに、コレラが原因で命を落としたに違いないと確信しました。このコレラ菌を発見したのが、他ならぬコッホなのです。コッホが北里に示した研究テーマは、「酸やアルカリをコレラ菌に与えた時、菌がどんな反応を示すか」というものでした。北里は、たくさんの種類の酸やアルカリを用意し、濃度も変えて、チフス菌、コレラ菌に試し、それらを論文にまとめました。この北里の研究論文はドイツの医学雑誌『衛生学雑誌』に掲載されるとともに、コッホが大絶賛をしたと言われています。それ以来コッホは、コレラについてのテーマを次々に北里に与え、実験を奨励しました。このことは、北里がコッホから絶大なる信頼を得ていた何よりの証拠です。

一方、北里の留学中には、とある有名な人物もドイツに留学をしていました。陸軍の軍医だった森林太郎(鷗外)です。森鷗外といえば、『舞姫』(ベルリンに留学していたエリート官僚の男と、貧しい踊り子との恋を描いた小説)の作者として知られています。年齢は北里の方が上ですが、鷗外は東京大学医学部の先輩でした。

実はこの2人は、脚気という病気を巡って学術論争を繰り返していました。当時の陸軍は脚気に苦しむ軍人が多く、鷗外にとっても懸案事項でした。この脚気については、北里より前にベルリン大学衛生研究所での留学経験を持つ緒方正規が、「脚気菌」を発見したという発表をしていました。鷗外もこの発見を支持し、脚気の原因は脚気菌による細菌感染症であると主張します。しかし北里は自らの研究によって、緒方が見つけたという「脚気菌」は雑菌だったのだろうと考えており、脚気の原因は別にあると推測していました。こうした経緯から、意見の異なる2人は舌鋒鋭く論戦を交わすことになったのです。実際のところ、脚気は脚気菌のせいではなく、ビタミンB1が不足することによって起きる病気であるため、北里の主張にこそ真実がありました。それがはっきりと分かるのはずっと後のことでした。

もっとも、北里と同じように、脚気の原因は細菌ではないと考える人も当時から存在しました。鷗外のいた陸軍と対をなす海軍では、脚気の原因について独自に分析・実証し、所属の軍人達には白米ではなく麦飯を、和食よりも洋食を勧めていました。しかし陸軍は、「海軍の言いなりになりたくない」という理由から、脚気菌原因説を取り下げませんでした。後の明治37~38(1904~1905)年の日露戦争では、脚気によって多くの戦病死者が出ており、戦病死者総数37,200人のうち、なんと27,800人の死因が脚気だったのです。鷗外と北里の持論のどちらが正しかったかは、多くの犠牲者を生んだ悲惨な歴史が証明することになりました。

コッホに師事し、世界の医学界で頭角を現し始めた北里でしたが、直属の先輩である緒方の「脚気菌」発見を否定したことは思わぬ波紋を生みます。陸軍はもちろん、所属する内務省からも、厳しい非難の目が向けられることになるのです。



ローベルト・コッホ
【提供】学校法人北里研究所
北里柴三郎記念室



ベルリン大学衛生研究所
【提供】学校法人北里研究所
北里柴三郎記念室



ドイツ留学中の森鷗外
文京区立森鷗外記念館所蔵